

インド・ケーララ州のテイヤム儀礼に関する文化継承と環境保全をめぐる軋轢

竹村 嘉晃 (人間科学研究 人類学)

1. 問題の所在

本研究は、インド・ケーララ州北部のローカルなヒンドゥー社会における儀礼の実践をめぐって、伝統の保存か野生動物の保護かで対立する人びとの位相とかれらの言説を照射する。

インド・ケーララ州北部のローカルなヒンドゥー社会では、10月下旬から6月上旬にかけて、テイヤム *Theyyam* という神霊を祀った儀礼が盛んに行われている。指定カースト（不可触民）に属する実践者の身体を媒介として儀礼空間に顕現するテイヤムは、祭文（トータム）や身体パフォーマンス（カラーシャム）を通じて土地の歴史や自らの起源譚を再現した後、参拝者たちに祝福や託宣を与える。テイヤムの種類は、祖先神、英雄神、動物神などのべ400以上あるといわれるが、なかでも有名なテイヤムの一つに、ヴァイナートゥ・クラヴァン *Vaynattu Kulavan* と呼ばれる神霊がある。

神話によれば、ヴァイナートゥ・クラヴァンは、狩猟と飲酒肉食を好む英雄神といわれる。それゆえ、儀礼の際にはトディ（椰子酒）と動物の肉またはそれに代わるものが供物として捧げられる。ヴァイナートゥ・クラヴァンを祀った祠・寺院は、州北部のカンヌール県とカーサルゴッド県内に広く分布しているが、カーサルゴッド県カーサルゴッド・タルク内で行われる儀礼では、神霊への供物として野生動物の捕獲（または乱獲）及び供犠 *Bhappeedal* が今日まで行われている。近年、この実践をめぐって、寺院関係者や地元住民と州政府の森林・野生生物局との間で軋轢が生じ、捕獲反対集会の開催や捕獲阻止を目的とした警察の介入など物議を醸し出している。テイヤムに関するこれまでの先行研究では、儀礼の保存をめぐるイデオロギーや祠・寺院をとりまく生態的環境などが論じられているが、本研究では、問題の経緯と背景にある文化社会的状況を描きながら、供犠の実践をめぐる多様な主体とその言説を明らかにしていく。

2. 調査概要

期間：平成20年7月30日～9月2日

調査地：インド・ケーララ州のカンヌール県カンヌール・タルクとカーサルゴッド県カーサルゴッド・タルク

調査内容：関係機関（New Indian Express 社カーサルゴッド支部、森林・野生生物局、地元の環境保護団体、州政府観光省カーサルゴッド支部、儀礼実行委員会）およびテイヤム儀礼の実践者や地域住民などへの聞き取り調査
文献、パンフレット、現地新聞、映像記録などの収集

3. 対立の契機

カーサルゴッド県カーサルゴッド・タルク内のK地区では、2005年3月にヴァイナート・ク

ラヴァン・テイヤム祭礼が 40 年ぶりに開催された。その際に、テレビ局が撮影・放映した野生動物を供犠する映像が引き金となり、狩猟と供犠の実践がクローズアップされるようになる。

4. 調査成果

調査から以下のような知見がえられた。

a.) 経済発展を背景にした儀礼の隆盛と規模の拡大

2000 年前後から K 地区近辺ではヴァイナート・クラヴァンの儀礼が盛んに行われはじめる N 寺院は 40 年ぶりに儀礼を再開(2005 年一)、大寺院のように参拝者への食事を提供
参拝者は神霊のお下がり *prasadam* (野生動物の肉が入った料理) を楽しみにしている

b.) 森林・野生生物局 Forest & Wildlife Department (カーサルゴッド地区)の立場

カンヌール出身の局長らが問題を顕在化、狩猟禁止を求めるワークショップ等の啓蒙活動
絶滅しつつある野生生物の保護という建前と管轄区域外の狩猟は黙認という本音

c.) ヴァイナート・クラヴァンとバピーダル儀礼のワークショップ

森林・野生生物局が儀礼時の狩猟禁止を訴えるワークショップ(2006, 2007 年)を開催
フォークロリスト、NGO、研究者、儀礼実践者、地域住民など 500 名近くが参加
狩猟禁止や代替案を提案する側と「伝統」または「慣習」として継続を訴える側の対立

d.) 地域住民の反応

強い「信仰」をもち、「伝統」「慣習」であると主張する住民

例) 反対派の役人と警察官に起きた不幸、「ヴァイナート・クラヴァンに罰せられた」
モスリムやクリスチャンも同様の動物供犠をおこなっていると反発
「教養のある人」・NPO 団体などは狩猟に反対

e.) 儀礼の主催者や実践者の語り

「他の地域では行われぬ、われわれの慣習」という主催者、変更には抵抗感のない実践者

f.) 「形式的な」警察の介入

2006 年の儀礼では会場に多数の警官が動員、情報漏れによって狩猟者の逮捕はなし

g.) 地元の政治的状況

BJP (インド人民党) と CPIM (インド共産党マルクス派) の間で緊張関係がみられる地域
BJP 側は「伝統」「慣習」として狩猟の継続を強く主張

CPIM の上層部は儀礼に参加せず、儀礼実行委員会のなかには黨員または支持者が数多くいる
両者ともに狩猟擁護の立場にまわる

5. おわりに

ヴァイナート・クラヴァンのバピーダルをめぐる対立は、現在のところローカルな政治のバランスや圧力によって、うやむやのまま沈静化しつつある。しかし、儀礼が近づくにつれて賛成・反対両者の語りは繰り返し行われはらずである。本研究の今後の課題は、伝統文化の伝承に関する秩序や人々の意識の変容を動的に考察し、文化継承に対する価値観の新たな再編の行方を見守ることである。